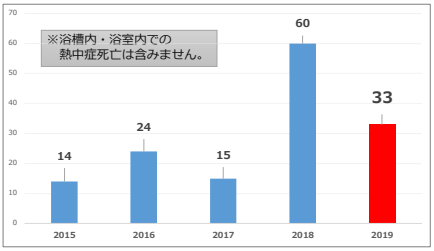
2019年

大阪府監察医事務所で取り扱った

熱中症死亡に関する統計

大阪府監察医事務所

過去5年間 6-9月 (夏期) の熱中症死亡者数



- 全国的に酷暑と言われた2018年（平成30年）に比べると減少したものの、過去5年間では2番目に多い死亡者数となった。

過去5年間　6-9月（夏期）の各件数

	検案数	解剖数	CT撮影数(2019年より実施)	熱中症死亡者数
2015年	1310	352		14
2016年	1286	286		24
2017年	1315	260		15
2018年	1440	260		60
2019年	1338	193	212	33

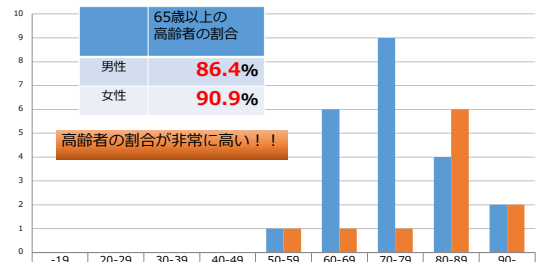
2019年熱中症死亡件数　月・男女・発生場所別

2019年	検案数	※熱中症死亡件数	性別		発症場所	
			男	女	屋内(自宅内)	屋外
6月	299	0	0	0	0	0
7月	343	1	0	1	1	0
8月	396	30	20	10	28	2
9月	300	2	2	0	2	0
合計	1338	33	22	11	31	2

※熱中症死亡者を『検案した日』で件数を示しています。
検案した日と死亡日は差が生じることがあります。

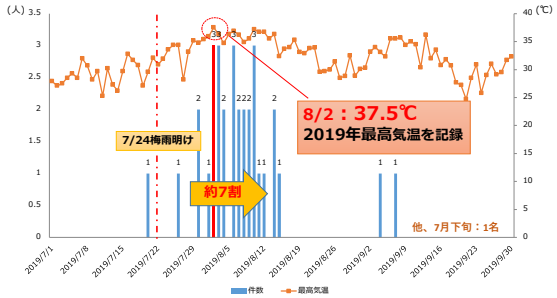
- 男女比は２：１
- 死亡例のほとんどが、8月の屋内(自宅内）での発症例であった

年齢別熱中症死亡者数



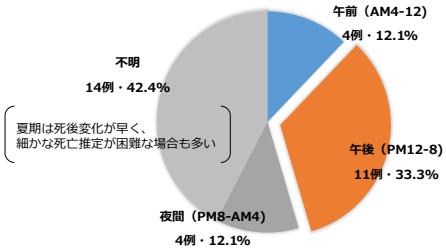
	-19	20-29	30-39	40-49	50-59	60-69	70-79	80-89	90-
男	0	0	0	0	1	6	9	4	2
女	0	0	0	0	1	1	1	6	2

死亡日(※推定含む）と大阪市の最高気温



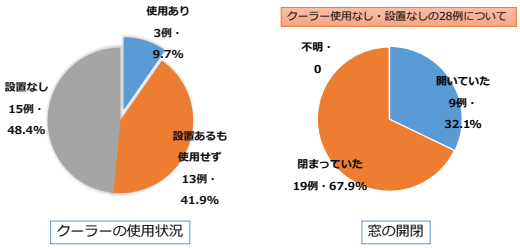
熱中症死亡者数の約7割が7/29～8/11の2週間のうちに集中していた

死亡時間帯



死亡時間帯を見ると最も気温の上がる午後（12-20時）が約3割と最も多かったが、午前や夜間でも発生していた。

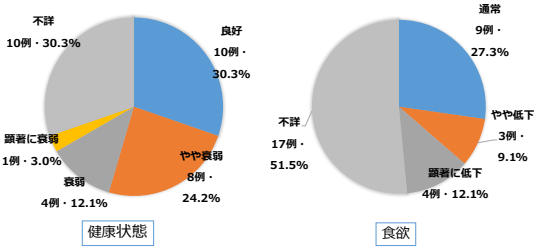
屋内(自宅)死亡例のクーラー・窓の開閉について



- 死亡時にクーラーを使用していた例は3例のみで１割に満たない
- クーラーの使用なし・設置がない例のうち、窓が開いていた例は約３割

→ 多くが窓も閉めきった室内で発見された

死亡前 一週間の健康状態



- 普段と変わりないと答えた例もあったが、衰弱に気付いている例も多くあった
- 独居の人の場合、普段の生活状況の把握が難しく不詳も多い

今回の統計から見えること ～熱中症死亡を避けるために～

- 高齢者の自宅内での熱中症死亡がほとんどであった
- 死亡時にクーラーをしていた例は1割に満たない
- 昼夜、場所を問わず、誰にでも熱中症は起こりうる

- 高温多湿の環境を避けるため、
  室内では適切なクーラーの使用を心掛けてもらいたい！！
- 本人や高齢者を見守る人の熱中症に対する意識をさらに高め
  積極的に対策をとる！